

# しろあとだより

第 10 号  
2015 年 3 月  
高槻市立  
しろあと歴史館

## 目次

「郷土玩具」の歴史と資料化に関する試論 清水 亜弥	1
「畑山神社と伝・林丹波守の五輪塔について」千田康治	9

## 「郷土玩具」の歴史と資料化に関する試論

清水 亜弥

はじめに

「郷土玩具」という言葉は、今や新聞や雑誌などでも用いられる一般的な用語となつてゐる。しかし、例えばその名を目にして当館へ訪れた来館者に、「郷土玩具」とは何だと思えますか？と尋ねた場合、人によつてその印象が異なることも多く見受けられる。共通のイメージとしては「昔懐かしい玩具」といったところで、具体的な名称として聞かれるのはコマ・凧・羽子板・こけしなどである。少し関心の高い人になると土人形・張り子・姉様人形などの名前が登場する。

実は、「郷土玩具」とは何かという、一見根本的に見える問題には回答がない。このことは、郷土玩具の収集を趣味とする一部の愛好家や、「郷土玩具」を対象とする研究者の間では認識されているが、一般的にはあまり知られていないだろう。本稿ではまず、先行研究に基づいて「郷土玩具」とその収集・研究の歴史を追い、現在の郷土玩具研究について触れる。その上で、歴史資料として郷土玩具を捉える視点について考えてみたい。

### 一 郷土玩具の特徴

ここで、まず本稿がイメージする「郷土玩具」について斎藤良輔編『郷土玩具辞典』を紐解いてみる。本書では郷土玩具について、①明治期以前から存在した、生活に身近で安価な材料を用いていること、②手作りであり、各地ごとに民芸的な個性があること、③民間信仰と結びついたものや縁起物的な性格を持つていること、④各地の習俗と結びつきが深く、季節感に富んでいること、⑤江戸時代から産業革命前の明治期にかけて誕生し、

各地域下町文化などを母胎にした郷土色を帯びていること、といった特徴を持った玩具のこととしている(1)。

しかし、これは郷土玩具とは何であるかを定義するための「条件」ではなく、あくまで今日収集され郷土玩具と呼ばれているものを客体視した際に、多くのものに共通する「特徴」である。そのため、これらの要素を満たさないものも郷土玩具と認められるし、「郷土色」の有無などは主観によるものが大きいといえる。

さらには③の縁起物に関するものという要素を持つ、純粋なおもちゃとは言いがたい節句人形や達磨、社寺のお守りや絵馬といったものも含まれるのである。なお、斎藤氏は本文の中で「郷土玩具とは何か」という問いに対しては議論が尽くされておらず、この言葉で示されるさまざまな玩具についての研究も、これから行われなければならないとしている。

### 二 「郷土玩具」の歴史

そもそも、郷土玩具という言葉が生まれたのはいつのことだろうか。江戸時代の人々が、自らにとつて身近な玩具を「郷土玩具」と呼んでいたわけではなかった。江戸時代には、安永二年(一七七三)に、浮世絵師の北尾重政が描いた玩具を題材とした絵本『江都二色』が刊行されており、文政十三年(一八三〇)に喜多村節信が著した類書『嬉遊笑覧』に玩具や遊びを取り上げた項目があるなど、



図1 『江都二色』

玩具類に対して関心を持つ大人が現れていたことをうかがわせている。しかし、前掲の五つの特徴を持つような、「昔懐かしい手作りの玩具」のようなものに注目し、収集する人々が現れ、活動しはじめたのは、明治時代に入ってからのことである。

その収集家たちの中で、最も初期に現れた代表的な人物が、「玩具博士」と呼ばれた清水晴風である。晴風については、これまで大正十四年発行の『神田の伝説』に記された伝記のみが知られていたが、近年新たに発見された資料に基づいて、林直輝氏・近松義昭氏・中村浩訳氏による『おもちゃ博士・清水晴風 郷土玩具の美を発見した男の生涯』(2)が発行されている。

晴風は嘉永四年(一八五二)に江戸神田の車宿の跡取りとして生まれ、俳諧や日本画に精通していた。彼は明治十三年(一八八〇)に、自らの幼馴染たちと集まって飲食を共にする会合「竹馬会」を開いた際、子どもの仮装をして、昔懐かしい玩具を持ち寄った。

そのとき集まった玩具を見て関心を持ち、自らで収集を始め、明治二十四年(一八九一)、郷土玩具の画譜『うなるのとも』の第一編を刊行するのである(3)。

『うなるのとも』には、三春駒(福島県)や伏見人形(京都府)、木葉猿(熊本県)のような特定の地域で作られていた「郷土玩具」が既に登場している。この本は人気を集め、晴風の生前に六編まで、四三九点の玩具が紹介された。

清水晴風の「竹馬会」と、その後明治四十二年(一九〇九)に結成した「大俳会」には、評論家の内田魯庵、井原西鶴などの研究者淡島寒月、戯作者の仮名垣魯文、人類学者の坪井正五郎、民芸運動の中心人物となったバーナード・リーチといった、当時の知識人たちが参加している。斎藤良輔は、彼らの活動について、



図2 『うなるのとも』第一編(当館蔵)

明治政府が推し進めた近代化・西洋化への反発として明治二〇年前後に起こった、江戸時代という過去への憧憬とその文化の見直しの時流と、根底を同じくするものだとしている(4)。

また一方で加藤幸治氏は、清水晴風が意識していたのは近代文化そのものではなく、当時の政府が日本の「古器旧物」を序列化してその上位のものを「美術」として海外へのアピールに用い、その価値を高めていたことに対してであり、これに対抗して「美術」と評価されることのない「諸国の手あそび品」のようなものこそ評価すべきとの意図があったことを指摘している(5)。

いずれにせよ、いまだ江戸時代の記憶も新しい明治期に、金銭・時間的にゆとりがあり、社会的地位と教養がある知識人というべき人々の間で生まれた、古い玩具への関心と、それに伴う収集熱は、『うなるのとも』の出版、また博覧会の開催などで一般へ浸透していくことになる。

大正時代に入ると、「郷土玩具普及会」を結成した有坂與太郎や玩具の版画集『おもちゃ画譜』『おもちゃ十二支』などを出版した川崎巨泉などが活躍を始める。大正十二年(一九二三)の関東大震災を経ても、なおその流行は一層盛り上がりを見せ、東京や大阪には郷土玩具を販売する店が生まれる。名古屋の松坂屋や大阪の三越といったデパートでの即売会も行われた。『うなるのとも』を土台に、全国各地の玩具を通覧できる書物も相次いで出版され、童画作家であった武井武雄の『日本の郷土玩具』(昭和五年・一九三〇)などをバイブルとした玩具の収集は一般の学生や社会人へも広まっていった。

また東京だけではなく、各地方都市でも同好の人々が会を結成し、同人誌や会報誌を発行しており、その地域の玩具に特化したもの、土鈴やこけし、天神人形といった個別のテーマに関するものなどが数多く見られた。誌上では玩具についてただ列記するのではなく、製作方法や発祥にまつわる伝承、作者への聞き取りの結果などを記した原稿を掲載している。それらの蓄積がさらに書物になって発行されるなど、自分達の活動を表現する場にもなっていたのである。

当館が所蔵する郷土玩具コレクションのうち、「秋山コレクション」は、昭和六年との記入がある鯨車(高知県)を含む、総数四九六件・総数六五八点に及ぶ郷土玩具群である。収集した秋山國三氏(一九〇七年生)は京都の

茶商「ちきりや」に生まれ、後に歴史学者として同志社大学名誉教授になった人物で、収集当時は学生であったとみられるが、大店の息子として経済状況にはかなりゆとりがあったという。

秋山コレクションは、地元の京都のものを中心に、関東地方の張り子や四国や九州・鹿児島などの郷土玩具、東北のこけしといった、当時紹介されていた代表的なものを含んでいる(6)。当時盛んに活動していた玩具の同人に加わるか、少なくとも彼らの著作などに大きな影響を受けていたと考えることができるだろう。

「郷土玩具」という言葉が誕生したのもこの時期であった。京都で創刊された雑誌『郷土趣味』の誌上で、郷土史研究家の田中緑江が大正十二年(一九二三)に「郷土的玩具の話」と題する連載(第二回)からは「郷土玩具の話」と改題を開始し、それ以降「郷土玩具」という名称が定着していったという。それまでは「諸国玩具」「地方玩具」「土俗玩具」などさまざまな呼び名で呼ばれていた。

当時、「郷土」という言葉は人々にとって目新しいものであった。大正二年(一九一三)には日本民俗学の創始者として知られる柳田國男が高木敏雄とともに雑誌『郷土研究』を創刊している。

香川雅信氏はこの時柳田が「郷土」という言葉に与えた意味を、「郷土」とは、「故郷」という特権的なただ一つの場所ではないが、それと同等の価値を持った愛すべき場所というニュアンスを帯びた言葉であった」とし、特定の「私」とは結びつかない虚構の「原風景」、失われてしまった「ここではない場所」にノスタルジアを感じるという新しい感性を表現するための言葉であったとしている(7)。

また香川氏は『郷土趣味』誌上においても、郷土玩具の通信販売のための目録に宣伝文として「その地方色を胸に浮べている、未だ知らない郷土



図3 秋山コレクション(一部)

の景物を想ふと云ふ誌的快感の外に、その形状や色彩の如何にも素朴な印象風な処が窺はれて誠に趣味の深いものであります。」(8)とあるのに着目し、「未だ知らない郷土」という一見矛盾した表現は、柳田のいう「郷土」と同じ意味を持つからこそ可能であったとしている。

一九一〇年代には、写真や唱歌などにこのような自分の郷土ではない匿名の風景が登場しており、その背景には、「都市の病」と呼ぶべきノスタルジアがあったことが指摘されているが(9)、香川氏はその感性は共通するものであったという(10)。

このように見てみると、当時の収集家たちにとって「郷土玩具」という言葉は、目新しく学問的な雰囲気があり、また自分達が求めるような、失われつつあり郷愁や憧憬を誘うものを表現するのに最適な言葉だったことがわかる。本来、玩具について表現するために生まれた言葉ではなかったものを、既に収集の対象とされていたものに対する名称として採用したのである。

なお、『郷土趣味』は郷土玩具について特化した雑誌ではなく、各地の伝承や祭礼、風習や産物などについて各人が報告するものだった。玩具については毎号一編が載る程度だったが、玩具収集の熱に影響されたものか、編集後記に、「此方面に御趣味なき方には全くお気の毒ですが、一面愛好の士からは大変後援助も賜はり且つ期待して頂いておりますので当分継続したひと思ひます」とあるのが興味深い(11)。なお、同誌の編集には「郷土玩具の話」の筆者である田中緑江が関わっている。

こうして、自然淘汰的に「郷土玩具」と呼ばれるようになったものは、前述の通り愛好家達だけではなく一般の人々にも買求めるられるようになった。しかし、一方で愛好家向けに細々と作られる玩具や、大正十四年(一九二五)に柳宗悦が提唱した民芸運動にも通じる、新しく創出された玩具(創生玩具と呼ばれた)を「郷土玩具」に含める

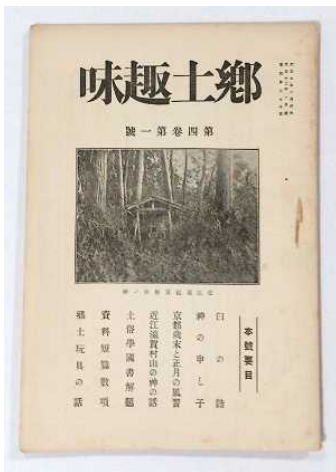


図4 『郷土趣味』(当館蔵)

べきかといった議論も起こり、年に一度郷土玩具特集号を発行していた『旅と伝説』という雑誌では、昭和七年（一九三二）発行の第五年十一月号において「郷土玩具は将来如何になり行くか」「進展するとしたら如何なる道を求むべきか」というアンケートも行われている。

このアンケートには「子どもたちが遊ばず、大人の愛好家のために作られるものや、地域色が失われたものは郷土玩具と呼ぶべきでない」、あるいは「いずれ郷土玩具というものは無くなる（もしくは既に存在していない）が、土産物として郷土色を活かしたもののだけが生き残っていくだろう」といった意見もある(12)。また郷土玩具特集号の編集者である有坂與太郎は、「その時々々の製作者の生活を描写するのが郷土玩具であったのだから、作者の生活を反映して製法や形状が変わろうともそれは郷土玩具であり失われることはない」とし(13)、実際に彼は製作者が時代に合う新しい玩具を生み出すことを奨励し支援している。このように、一見趣味を同じくする収集家たちの中でも様々な意見が存在していたのである。

戦前に最高潮を迎えた玩具収集ブームは、その後の第二次世界大戦の影響下で一旦下火になるものの、戦後には愛好家らの会が次々と復活し、機関紙なども発行されるようになる。戦中・戦後の生活様式の変化の中で、細々と作られていた郷土玩具が姿を消す一方、高度経済成長期にはデパートでの即売会が再び盛んになり、観光土産としても各地で新しく「郷土玩具らしい」ものが作り出された。郷土玩具を買い求める流行は戦前と同様、愛好家だけでなく一般の人々の生活の間でも広まったのである。

これに対してもまた、愛好家らの間では「郷土玩具」と呼んでよいのかについて議論がなされたものの、決着を見ることはない。

当館所蔵の郷土玩具関連資料の中には、昭和四十七年（一九七二）に郷玩ゼミナルという会が行った「郷土玩具とは何か」というアンケートの回答を収録した冊子があるが、そこで議論される内容は昭和七年の『旅と伝説』における



図5 『旅と伝説』（当館蔵）

アンケートと共通するものがある。

### 三 「郷土玩具」の研究

昭和四十年代以降には、郷土玩具を収集するだけでなく、歴史文化的に価値のあるもの、民俗学的資料の一端を担うものとして捉え、調査研究する人々が登場する。『郷土玩具辞典』を編纂し、『おもちゃの話』で、郷土玩具だけでなく戦前から戦後にかけての日本の玩具の周縁を描き出した斎藤良輔氏や、『郷土玩具考』（郷土玩具研究会、一九六六）、『日本の土人形』（文化出版局、一九七八）など多くの著書がある俵有作氏、そして当館に約一七〇〇点の伏見人形を含む約三万点の郷土玩具を寄贈した、奥村寛純氏もその一人といえるだろう。



図6 伏見人形の原型（奥村コレクション）

奥村寛純氏は、大正十五年（一九二六）に大阪府三島郡島本町に生まれ、関西大学卒業後中学校の教師として勤める傍ら、郷土史研究と郷土玩具の調査研究にあたった。伏見人形の現存唯一の窯元「丹嘉」において、人形の原型を網羅的に調査し『伏見人形の原型』（丹嘉、一九七六）を発行し、また平成四年まで丹嘉で使用されていた窯の保存を図り、奥村氏の働きかけにより日本郷土玩具博物館（広島県福山市）に移設された。『京洛おもちゃ考』（創拓社、一九八二）や『浪花おもちゃ風土記』（村田書店、一九八七）といった著作もある。文中では個々の郷土玩具に関する近世以降の文献や、発掘された埋蔵資料にまで言及し、抽象的な「郷土色」や「素朴な美」といった評価にとどまらない客観的な情報を提示している。

「奥村コレクション」は昭和三〇年代以降に収集されたものであり、古い資料は少ない。しかし、奥村氏は伏見人形や出雲人形（奈良県）、小幡人形（兵庫県）などを収集する際、可能な限り全ての種類を集めることを意図しており、研究資料としての収集という意味もあつたことが窺える。また伏見人形の原型やそれから取った型（雌型）などは一般に流通するもので

はなく、奥村コレクションの特徴の一つといえる(14)。

郷土玩具のコレクションは、近年では各地の博物館に収蔵され、調査研究の結果、文化財として評価されている状況である。

京都府立総合資料館の「拙コレクション」は、資料館でその調査を担当した石沢誠司氏の研究によって、文献や民俗との関係から人々の生活を知る資料として位置づけられた。また暮らしの中での用途を重視した分類と産地別の分類を併用した、資料としての整理方法なども提言している(15)。たつの市立龍野歴史文化資料館の「駒井コレクション」、日本玩具資料館の「尾崎コレクション」など、調査研究と合わせて注目されるコレクションは多く、また平成二十三年には博物館さがの人形の家が収蔵する人形が「京都の郷土人形コレクション」として国の登録有形民俗文化財となっている。「蝙蝠堂民俗玩具」は三重県の、黎明館の「川邊コレクション」は鹿児島県の指定有形民俗文化財である。

こうした調査研究が各地で進むのと同時に、郷土玩具を「郷土玩具」としてではなく、歴史研究の題材のひとつとして用いる研究も増加している。郷土玩具に対して明治以降の知識人たちが向けたまなざし、さまざまに展開された活動を近代日本の歴史的背景に位置づけようとする加藤幸治氏の『郷土玩具の新解釈 無意識の“郷愁”はなぜ生まれたか』(16)は、「郷土玩具」の歴史とそれに関わった人々などについての情報を集積した最新の研究である。

また郷土玩具収集ブームの展開から、当時の社会風潮と精神性を追う香川雅信氏の研究(17)や、民俗学に顕著な足跡を残したアチック・ミュージゼアムの渋沢敬三の研究のなかで、渋沢が初期に郷土玩具を収集していた点に着目する川越仁恵氏の研究(18)など、様々な視点から重要な研究がある。考古学の分野でも、東京大学構内の遺跡から出土した人形・玩具を分類し、年代の推移を検証する安芸菟子氏らの研究(19)や、大阪市内の蔵屋敷や武家屋敷、近世墓、製作跡などから出土した土人形・土製品を集約し、使われた土や技法などに注目する川村紀子氏(20)、発掘調査結果とともに、瓦・土師器・陶器など近世京都の窯業との関連性、人形をめぐる文化的背景から伏見人形を総体的に捉える木立雅朗氏の研究(21)などがあり、近世遺跡から出土する土人形や土面子、ミニチュア土製品といった玩具などが注目されている。さらには考古・文献・民俗といった異なる分野からの視

点で研究しようとする学際的な取り組みも盛んとなっている(22)。

研究のうえで「郷土玩具」という名称が何を指すかといったことは問題ではなくなっているといっても、展示によってその周知を図ろうとする立場である博物館などは、なおその名称に縛られる部分もある。吉徳資料館学芸員の林直輝氏は「郷土玩具ということばが一般化して久しい今日、郷土玩具の代わりとなる名称をつくるということではかえって混乱を招く恐れもあり、第一それは根本的な解決にはならないであろう。郷土玩具の名に相応しくないものを選び出し、それぞれ新しい枠組を作らないことには本当の研究は始まらないのではないか」と述べ、郷土玩具に対して幼い日の思い出や郷愁を感じる人が少なくなってきた時代には、郷土玩具と呼ばれるものの魅力や価値を知ってもらうにはどうすればよいのか、郷土玩具を愛する人だけではなく、作者も博物館も真剣に考えなければならぬと呼びかけている(23)。

#### 四 「土産物」という枠組

当館では、三人の収集家による郷土玩具コレクション(秋山・奥村・玉村コレクション)の約三万点を所蔵し、調査研究とともに企画展やポップク展示などの形で展示公開を行っている。

戦前の収集ブームを反映した秋山コレクション、戦後の郷土玩具研究者による奥村コレクションについては前述した。玉村コレクションは、出張の多いサラリーマンであった玉村時男氏が、その記念になるようにと行く先々で購入し、全国の郷土玩具約三八〇〇点を集めたものであり、戦後の観光旅行の発展とともに広まった郷土玩具収集ブームを反映したものとみることができる。

それぞれ特徴的なこれらのコレクションに含まれる資料を見ると、いわゆる手に持って遊ぶ子どものおもちゃとは呼びにくいものが多く含まれていることに気づかされる。その多くが神社やお寺から授かった授与品や土鈴、絵馬、神仏を象った人形などである。

これを「郷土玩具」というカテゴリーで展示して良いのかという思いで調べていくうち、「郷土玩具」の言葉の曖昧さを知り、ここから選び出して考えることができるものではないかと感じられた。平成二十七年一月四日から二月二十二日まで、当館で開催した第二十八回企画展「郷土玩具と

出会う場所く神社・お寺・名所おみやげ市」は、それら授与品や参道、門前の店で江戸時代から売られていたものを「郷土玩具」のコレクションから選び、展示するものであった。

一時期、郷土玩具の収集家らと交流を持ち、後に方向性を離れた柳田國男は、朝日新聞に連載した『こども風土記』(24)のなかで、「おもちゃの起り」という記事を書いており、そこでおもちゃの起源として三つの要素をあげている。

それから第三には、買うて与える玩具、これが現今の玩具流行のもとで、形には奇抜なものが多く、小児の想像力を養うには十分であったが、如何せん、そういう喜びを味わう折が少なかったのである。おみやげという言葉でもわかるように、本来は物詣の帰りに求めてくるのが主であつて、したがつてその種類も限られており、だいたいにお祭に伴なうものばかり、たとえば簡単な仮面とか楽器とか、または神社から出る記念品のようなものであつたことは、深い意味のあることなのである。(中略) あんなオシャブリのような小さな玩具でも、やはり最初は、御宮筋であり、すなわち日本人の信仰から生まれて、発達したものだつたといふことである。

ここで柳田は玩具の起源を、寺社への参詣の土産やお祭りに伴うもの、神社の記念品であるとしている。

では、「御宮筋」とは何のことか。民俗学者の神崎宣武氏は、「土産」の語源を「宮筋(みやげ・みやげ)」であるとしている(25)。これは、神への供え物が入った箱・器という意味である。神前に供えたお神酒や食、べ物は盃や箱に入れて下げ渡され、神と人と同じものを食べる神人共食が果たされる。それをもって、神の分霊が宿った「おかげ(御影)」が得られたとする。その「おかげ」を持ち帰り、家族や周囲の人々に報告し分かち合うために、神社の紋が入った盃などが持ち帰られたのがみやげの原初的な形態であつた。

神仏の御利益を持ち帰るためのものとして、お札や社寺からの授与品が同様の役割を果たしたが、寺社の参詣者が増えるにつれてが社寺からの授与品ではまかなえなくなり、宮筋に準じる記念品や、それに代わる土産(どさん)品を並べて売る店が門前に発達する。それが「みやげ」と呼ばれ、土産品と表記されるようになったという。

江戸時代には、参勤交代の大名や幕府の役人の公用のため、五街道を中心に街道が整備され、宿駅制度が整う。移動の自由がなかった農民なども、寺社参詣と治療のための湯治に関して規制がゆるやかであり、文化・文政期頃(一八〇四〜三〇)には伊勢参宮を中心とした庶民の旅も盛んになった(26)。貨幣制度が整い、軽い高価な貨幣を必要に応じて小銭に両替しながら旅が出来るようになったことも、旅が盛んになった要因のひとつとされる。

また、全国的に広まった「伊勢講」や「金毘羅講」をはじめ、村や地域で同じ神仏を信仰する人々によって結成された「講」では、構成員が旅費を積み立て、くじ引きなどで代表者を決めて神社仏閣に送り出す、代参が広く行われた。代参者は、その寺社に間違いなく参詣したことを証明し、神仏の「おかげ」を講員に分配するため、お札を受け、また土産物を買求めたのである。旅のガイドブックとなる「道中記」や「名所図会」にも、土産物に相応しい名産物が紹介されている(27)。

改めてみてみると、「郷土玩具」のなかにはこの宮筋に相当する授与品や、寺社の縁起にちなんだ売り文句を添えたり、その土地の名産物を素材にして製作し、門前の店などで参拝客へ売られていたものが多い。これらは柳田のいうように子どもの玩具ともなり得たものもあつただろうし、神棚などに供えられたものもあつたと思われる。かつて「土産物」として人々の手に渡つたもの、という枠組みを想定して郷土玩具を研究することは可能だろう。

例えば、京都の伏見人形は、郷土玩具の代表のように言われるが、伏見稲荷大社の門前で参拝客向けに売られた土産物であつた。稲荷山の土

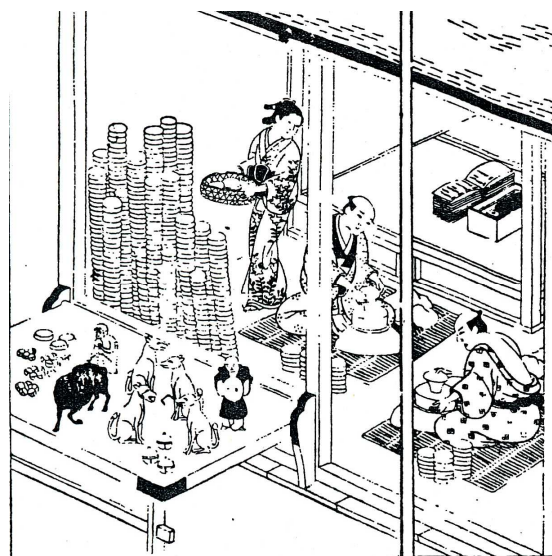


図7 『日本山海名物図会』

器)を田畑に割り入れると豊作になるといふ、稲荷神の豊作のご利益を持ち帰る「みやげ」でもある伏見人形は、流行に応じて次第に人形の種類も増え、ひとつひとつのモチーフがそれぞれ縁起をつけて販売されるようになった。

宝暦四年(一七五四)刊の『日本山海名物図会』では「伏見街道の土産細工西行行脚のすがた或は狐牛のたぐひ」と人形を作る店内と店頭の人形が描かれ(28)、文化三年(一八〇六)発行の『諸国図会年中行事大成』の伏見稲荷の記事では、周辺の家を作る土細工の稲荷人形は名だたる名物であり、二月の初午の日には思い思いに求めて「家土産」とする。これはこの神が衣食を守る神だからであるとしている(29)。

奈良・唐招提寺の梵網会(うちわまき)で撒かれ、参拝者に授与される宝扇は『うなるのとも』や『日本の郷土玩具』などに掲載されて古くから郷土玩具として収集されているが、もともと鎌倉時代に荒廃した同寺を再興した覚盛上人が、参籠中に蚊にまとわりつかれても動じなかったことになんで、弟子達が蚊除けの団扇を作り、魔除けの文字を記して祈ったことに始まる(30)。上人の命日を中興忌として、その団扇が授与されるようになったといふ、雷除け、安産、火除けや田畑の害虫駆除と五穀豊穡のご利益があるとして求められるものである。『諸国図会年中行事大成』にも、「今日団扇を多く堂にかざりて修法あり。会式終て、此団扇をまきて参詣の者に拾はしむ。里俗、これを得て雷除の守とす。」とある(31)。持ち帰ったあとに子どもが遊ぶことも無いとはいえないだろうが、玩具とするよりもやはり、そのご利益を家に持ち帰るためのみやげであっただろう。

このほか、住吉大社(大阪府)の住吉人形や、今宮戎神社(大阪府)の十日戎の縁起物、金刀比羅宮(香川県)の讃岐一刀彫、芝大神宮(東京都)の千木管、法明寺(東京都)の鬼子母神のすきみみずくとといった寺社の授与品や参道で売られたものも、神仏のご利益を宿し、それを家に持ち帰ること、またそこを訪れたこと

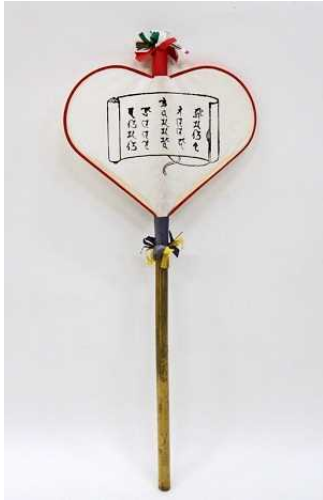


図8 唐招提寺の宝扇

を証明し、人に分け与える「みやげ」を起源とするものであったということができないのではないだろうか。

また、江戸時代の旅先として寺社とともに重要な位置を占める温泉地のみやげとして、東北温泉地のこけしはもちろん、有馬温泉(兵庫県)の人形筆、箱根温泉(神奈川県)の箱根細工、野沢温泉(長野県)のあけび細工なども有名である。野沢のあけび細工が、地元で多く生息するあけびの蔓を温泉に浸してから加工するものであるように、その土地の名産を活かしたものは、旅人がそこを訪れた記念としたり、逗留して治療を行った湯治客が家人のために購入する、「みやげ」の例と考えることができる。

大正・昭和初期に発行された鉄道案内図には、行き先で購入できる名産・名物のリストが載せられていることがあるが、そこには古賀人形(長崎県)、木葉猿(熊本県)、八幡駒(青森県)といった郷土玩具も名を連ねている(32)。木葉猿や八幡駒などは『うなるのとも』にも掲載され、郷土玩具の愛好家には良く知られたものになっていったと思われるが、一般の旅行者にとつて、これらは列車ではるばる訪れた先で買っておくべき、ご当地の食品や工芸品と同じ「みやげ」だったのである。

このように見ていくと、郷土玩具の中に含まれる「みやげ」を起源とするものは、江戸時代の庶民の生活の一部を彩った旅にまつわる要素として、あるいは寺社への信仰、温泉地の文化、地域の産業や流通など、多くの歴史研究の資料となりうるのではないだろうか。

### おわりに

小文では、「郷土玩具」という言葉とその収集の歴史、研究の発展について近年新たな展開が見られることもあり、当館所蔵の大正・昭和期の趣味雑誌等も繰りつつ整理を試みた。当館の郷土玩具コレクションについても、他のコレクションと比較しながら評価し、公開していきたい。



図9 野沢温泉のあけび細工

一方で、「郷土玩具」の枠を取り、歴史の一端を知るための民俗的資料という視点でも、研究や展示への活用を進めていく必要があるだろう。コレクションされたものは当時の資料そのものではなくとも、いかなる形や色、技法で作られていたのか、文献だけではわからない情報を伝えてくれる資料である。

「みやげ」についても、郷土玩具以外の当時の土産物との関わり、旅する人々の実態などを含めてまた論じることができればと考えている。



図10『全日本最新名勝名物地図』

- 【注】
- (1) 斎藤良輔「日本の郷土玩具―その歩みと系譜―」(同編『郷土玩具辞典』、東京堂出版、一九七一年)。
  - (2) 林直輝・近松義昭・中村浩訳『おもちゃ博士・清水晴風 郷土玩具の美を発見した男の生涯』(社会評論社、二〇一〇年)。
  - (3) 清水晴風『うなみのとも』(芸艸堂、一九九一年)。晴風の生前(一九二一〜一九三三)に第一編から第六編、引き継いだ西澤笛畝によって一九一七〜一九二三年に第七編から第十編が出版された。
  - (4) 斎藤良輔『おもちゃの話』(朝日新聞社、一九七一年)。
  - (5) 加藤幸治『郷土玩具の新解釈 無意識の「郷愁」はなぜ生まれたか』(社会評論社、二〇一一年)。
  - (6) 拙稿「秋山國三郷土玩具コレクションについて」(高槻市教育委員会『高槻市文化財年報 平成23年度』、二〇一四年)に目録を掲載している。
  - (7) 香川雅信「郷土玩具のまなざし―趣味家たちの「郷土」―」(『日本民俗学』一三六号、日本民俗学会、二〇〇三年)。
  - (8) 郷土趣味社編『郷土趣味』第三号(一九一八年)。
  - (9) 佐藤守弘「郷愁のトポグラフィ―一九一〇年代の日本における風景写真の政治学―」(『文化学年報』五二、同志社大学文化学会、二〇〇三年)。
  - (10) 前掲注(7)。

- (11) 郷土趣味社編『郷土味』第四卷八号(一九三三年)。
- (12) 三元社編『旅と伝説』第五年十一月号(一九三二年)。
- (13) 有坂與太郎「郷土玩具即生活描写」(『旅と伝説』第六年十二月号、三元社、一九三三年)。
- (14) 奥村氏とコレクションの伏見人形については、高槻市教育委員会文化財課『高槻市文化財調査報告書第29冊 郷土玩具 奥村寛純コレクション―伏見人形―』(二〇一三年)。
- (15) 石沢誠司「拙コレクションの日本の部について―民俗的視点からみた郷土人形と郷土玩具―」(京都府立総合資料館『資料館紀要』第7号、一九七九年)。
- (16) 前掲注(5)。
- (17) 前掲注(7)、および「郷土/玩具考―二〇世紀初頭における(イノセンス)の発見―」(『日本学報』第二五号、大阪大学大学院文化科学研究科日本学研究室、二〇〇六年)など。
- (18) 川越仁恵「アチック・ミュージアムの「郷土玩具」時代」(『民具マンスリー』二七、六、神奈川大学日本常民文化研究所、一九九四年)。
- (19) 安芸穂子・小林照子・堀内秀樹「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」(東京大学埋蔵文化財調査室編『東京大学構内遺跡調査研究年報』二〇〇九・二〇一〇年度 第4部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要8、二〇一二年)、小林照子「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の年代的推移について」(同上)など。
- (20) 川村紀子「大阪出土の土製品―大阪市内を中心として―」(関西近世考古学研究会『関西近世考古学研究』16 土人形が見た近世社会、二〇〇八年)、「江戸時代大阪におけるミニチュア土製品の一考察」(『大阪歴史博物館研究紀要』第8号、二〇一〇年)など。
- (21) 木立雅朗「伏見人形の窠をめぐって―近世京都の窠業についての余察―」(『立命館大学考古学論集』一、一九九七年)、「考古学から見た土人形の出現と展開―偶像・明器・形代・人形の歴史的展開を中心に―」(関西近世考古学研究会『関西近世考古学研究』16 土人形が見た近世社会、二〇〇八年)など。
- (22) 関西近世考古学研究会の第二〇回大会「土人形が見た近世社会」(二〇〇八年)や、立命館大学木立研究室の文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「京都における工芸文化の総合的研究」によるシンポジウム「発掘!伏見人形―地下に眠る伝統工芸―」(二〇一二年)など。
- (23) 林直輝「駒井コレクションの郷土玩具」(たつの市立龍野歴史文化資料館『郷土玩具への想い』、二〇〇三年)。
- (24) 柳田國男『こども風土記』(朝日新聞社、一九四二年)。
- (25) 神崎宣武『おもちゃ 贈答と旅の日本文化』(青弓社、一九九七年)。
- (26) 荒井秀規・櫻井邦夫ほか編『日本史小百科(交通)』(東京堂出版、二〇〇一年)、池上真由美『江戸庶民の信仰と行楽』(同成社、二〇〇二年)など。
- (27) 前掲注(25)、旅の文化研究所編『絵図に見る伊勢参り』(河出書房新社、二〇〇二年)。
- (28) 名著研究所編『日本名所図会全集 日本山海名産図会 日本山海名物図会』(名著普及会、一九二八年初版、一九七五年復刻)。
- (29) 儀礼文化研究所編『諸国図会年中行事大成』(桜楓社、一九七八年)。
- (30) 宝扇に添えられている由来書より。
- (31) 前掲注(29)。
- (32) 「全日本最新名勝名物地図」(大阪毎日新聞社、一九三二年)。



## 焔山神社と伝・林丹波守の五輪塔について

千田 康治

はじめに

平成二十四年度以来、高槻市教育委員会では「高槻まちかど遺産」事業を推進している。第三期となる本年度は、上牧・高槻東地区に説明板が設置された。そのうちのひとつ、焔山神社(図1)の境内に所在する「伝・林丹波守の五輪塔」について、これまで不明であった林丹波守の比定を試みると共に、同氏が建立に関わった可能性が高い多宝塔(焔山神社から移築されて現存)を紹介する。

### 一 焔山神社及び五輪塔の現状

焔山神社は高槻市の東部、梶原一丁目に所在する。北摂山地の山裾に南面して位置し、鳥居の前には西国街道が通り、西隣には日蓮宗の田中寺(でんちゅうじ)が所在する。現在は本殿と拝殿等が現存し、後述する多宝塔の跡地には多宝神社、本殿の東側に宝篋印塔と五輪塔の二つの石造物が並んで建つ(図2)。宝篋印塔のいわれは不詳だが、五輪塔は林丹波守の供養塔との伝承がある。

五輪塔は基壇上から地・水・火・風・空の各輪を重ねた典型的なもので、高さが二二六・三cm、底辺正面の幅が八五・五cmである。空輪から下に一文字ずつ「妙」「法」「蓮」「華」「経」と彫られているが、他の銘文は確認できない。



図1 焔山神社境内(拝殿)



図2 伝・林丹波守の五輪塔(左)

### 二 焔山神社の由緒

焔山神社の由緒についての研究は、昭和三年(一九二八)に刊行された『大阪府史蹟名勝天然記念物 第二冊』(以下、『史蹟』と略す)において、郷土史家の天坊幸彦が「焔山神社」(原文ママ)の項で記したものが唯一のものである(1)。それを次に記す(傍線筆者)。

「春日大神、菅原道真を祀る。社伝によれば元龜年中林丹波守なるもの、金仙寺の鎮守三十番神の靈驗顯著なる信じ之を合祀し、新に殿舎を造営し二重宝塔を建て、精舎に改めて立源山永福寺と名けしといふ。蓋し此三十番神は郷土理元入道、社職高兵衛介の日蓮上人を迎へて其開眼をなし、当時の郷災を除きたるものなりといふ。慶長年中火災あり、殿舎什宝悉く焼く。是に於て村民協議金穀を募りて再興す。現在の社殿即ち是なり。境内六百三十六坪にして、本殿、拝殿、多宝塔は其棟札によれば宝永三年七月十三日大工喜右宮門の作る所、塔内安置の位牌に深智院常是日在禪定門といふありて其裏面に

這日在者寛文辛丑年当焔番神之拝殿廊架造建焉

とあれば、是又拝殿造立の年代を知るを得べし。

境内に五輪塔あり。寛永十三年十月七日妙法蓮華經龍源院宗雲靈とあり。伝へて林丹波守墓といふ。或は供養塔か。楠あり周囲約一丈五尺鬱々として社殿を蔽ふ。

正倉院文書

天平勝宝九年三月十六日摂津職解 中略 梶原寺作瓦陸仟枚云々

類聚国史

延暦十一年四月丙戌在摂津国嶋上郡梶原僧寺野六町尼寺野二町或寺家自買或債家所償並縁法制還与本主

摂津志

梶原寺梶原村元中四年寄附状在南都東大寺

とありて、この梶原寺の地は即ち此神社一带に亘る地域を包みたるものなるべく、境内には往古古瓦布目のものを掘り出すことあり。豊能郡小曾根村旧家今西文書に

梶折村 梶折寺木村伊勢守創弊林丹波守再建

とあれば、梶折村即ち梶原寺にして当時猶寺名の存したりしなるべし。現在、同社に関する解説の多くはこれに依拠している。五輪塔について

は、現状では確認できない寛永十三年(一六三六)年紀の銘文を記録しているのが貴重である。

これを踏まえ、畑山神社の由緒をまとめてみたい。

『史蹟』が言及しているとおり、同社が建つ場所は、かつての梶原寺の跡であったと推定されている。『高槻市史』によれば、『正倉院文書』の天平勝宝九年(七五七)の撰津職解に、当時造営中であつた東大寺大仏殿回廊用の瓦を四天王寺と梶原寺に計二万枚発注したことが記されており、『類聚国史』の延暦十一年(七九二)の記事からは、僧寺とともに尼寺があつたことがわかる(2)。社地周辺の発掘調査では、社地東側の隣接地から僧坊と推定される奈良時代の建物跡が見つかり(3)、北東の隣接地からは礎石が確認されている(4)。そして、後背部の斜面では、七世紀半ばから八世紀前半まで続いた瓦窯が見つかった(5)。

『今昔物語』には、十世紀後半のこととして、書写山円教寺(兵庫県姫路市)の性空上人を迎える都からの使いが、梶原寺の僧坊に宿した記述がある。元中四年(一三八七)には、後亀山天皇が梶原寺の建物を栄山寺(奈良県五條市)へ薬師堂として寄付している(『栄山寺文書』)(6)。以上から、梶原寺は十四世紀末期までは存続していたことが確認できる。

元龜年間(一五七〇～七三)に、林丹波守が金仙寺の鎮守三十番神を信仰して新たに殿舎を造営し二重宝塔を建て、寺院に改めて立源山永福寺と命名したとある。金仙寺は畑山神社の東側一〇〇mに所在する日蓮宗の寺院・一乗寺のことで、同寺が応永三十四年(一四二七)に日親上人によって同宗に改められる以前の旧称である。

三十番神とは、本地垂迹説に基づき、天台宗・日蓮宗で法華経を守護する神のことで、三十の神を一ヶ月間、一日一休ずつ祀る。このことから、永福寺が日蓮宗の寺院であつたことがわかる。

文化三年(一八〇六)作成の「山崎通分間延絵図」(東京国立博物館蔵)には永福寺の様子が描かれている(図3)。それによれば、西国街道沿いに「三十番神石印」と記された石碑が建つ。そして鳥居、多宝塔、拝殿があり、奥には本堂らしき建物と本殿が並んで描かれている。本殿には「天満宮三十番神 春日社」と三つの神名が並んで記されている。多宝塔の内部に安置されていた寛文元年(一六六一)の年紀を有する僧・日在の位牌の記述から、「畑番神」との別称があつたことがわかる。しかし、明治元年(一八



図3 「山崎通分間延絵図」永福寺部分  
(東京国立博物館蔵、画像提供：東京国立博物館  
Image : TMN Image Archives)



図4 「肉筆彩色西国街道名所絵図」梶原村番神部分(個人蔵・当館寄託)

六八)の太政官通達により日蓮宗寺院は三十番神信仰を禁じられてしまった(7)。そこで、寺院と三十番神を廃止し、春日大神、菅原道真を祀った神社へと改変されたと考えられる(8)。明治四年(一八七

一)の梶原村の人別帳には、「氏神畑山神社」の名が見える(9)。

同社に関する絵画史料としては、前記絵図の他に高槻市内の旧家が所蔵していた「肉筆彩色西国街道名所絵図」(個人蔵・当館寄託。図4)がある。本絵図は明和三年(一七六六)頃の景観を描いたと推定され(10)、鳥居、本殿らしき建物、多宝塔が描かれ、「梶原村 番神塔ハ林丹波守建立」と記されていることから、多宝塔も林丹波守にゆ

### 三 林丹波守と五輪塔について

五輪塔について、『史蹟』では林丹波守の墓、もしくは供養塔としており、現在地元では林丹波守供養塔と呼んでいる。該当する人物を特定する

ため、室町時代後期から江戸時代初期にかけて、「林丹波守」を名乗った人物を求めたところ、江戸幕府旗本の林家が丹波守を名乗っていることがわかった。

幕府が編纂した系譜集である『寛政重修諸家譜』で同家の系譜を確認すると、幕府旗本として初代になる正利の項に「(前略)(慶長)十三年今の呈譜十二年十月十七日美濃国大野郡清水にをいて死す。年四十五今の呈譜四十四法名宗雲。撰津国梶原村の永満寺に葬る。(後略) (丸括弧及び傍線は筆者)とあった(11)。この記述から、畑山神社ゆかりの「林丹波守」が林正利である可能性が極めて高くなった。また、没年と銘文の年紀の年代差から、墓ではなく供養塔と考えられる。寛永十三年は、正利の息子、勝正の代であるが、彼が五輪塔設置に関わったかどうかは不明である。

寺の名が、『史蹟』では永福寺、『寛政重修諸家譜』では永満寺と異なっている。寛永一〇年(一六三三)の年紀を有する『京本満寺末寺帳』には、同寺末寺として梶原村にある田中寺と永満寺が記されている(12)。一方で、『史蹟』以前に唯一永福寺と記されている文化三年(一八〇六)の「山崎通分間延絵図」には、同寺西北の山中に鳥居を描き、「永満寺持山神森龍王社」と記している。また、文久三年(一八六三)の史料にも永満寺の名があることから(13)、永福寺の名は、後に改名されたか、「満」の字の誤植がそのまま後世に伝わった可能性が考えられる。

林丹波守正利の事績についてみてみたい(14)。正利は美濃国(岐阜県)の生まれで、父の勝利は織田信長に仕えたが、事情により織田家を離れた。正利は小早川秀秋に仕え、采地一万三千七百石を領して鉄砲五〇挺を預かり、備前国(岡山県)片上に居住したとある(15)。

慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原合戦では、大谷吉継勢との戦いに功績をあげた。同七年に小早川秀秋が没すると、秀秋の遺品を持って江戸に行き、徳川家康に献上した。それを機に徳川家に仕えるようになり、翌八年に伏見城で徳川家康に初めて目通りし、美濃国可児郡と中島郡(共に岐阜県)で二千石余りの領地を与えられた。そして前記のとおり、慶長十三年に美濃国で没し、梶原の永満寺に葬られた。

#### 四 畑山神社から移築された多宝塔について

畑山神社には、かつて多宝塔が建っていたが、昭和三十五年(一九六〇)



図5 狭山山不動寺の多宝塔(2014年11月筆者撮影)

に他の社殿等の修繕費を捻出するため、西武鉄道株式会社に売却された(16)。同社が運営する埼玉県所沢市のユネスコ村に移築され、同所は現在、狭山山不動寺(狭山不動尊)の境内となっている(図5)。この多宝塔は『史蹟』に記された棟札の年紀から、宝永三年(一七〇六)に建てられたと考えられてきた。しかし、移築の際の解体作業中(図6)に二層目の屋根の化粧隅木から

- ①「慶長十二年 伊ぬい角木 樋口二郎右衛門尉御奉行 六月二十八日」
- ②「慶長十二歳より 別当栄秀 伊ぬいの角宝永三年百年 丙戌三月大吉 日日億」(傍線筆者)

の二つの墨書が見つかり、このうち、②の傍線部分は、①と同一人物の筆跡であった。これにより、この多宝塔は慶長十二年(一六〇七)に建立され、宝永三年に本殿を再建した際に、多宝塔の屋根の一部に修理が施されたと判断された(17)。そして昭和三十八年に埼玉県の有形文化財に指定されている(18)。多宝塔の概要は、高さ約14メートルの二重の塔で本瓦葺、下層は方形、上層は円形となっており、下層の屋根と上層とを白漆喰の亀腹で接続している(19)。

『史蹟』では林丹波守が「新に殿舎を造営し二重宝塔を建て、」と記し、



図6 移築のための解体作業の様子  
(当館蔵。1960年2月撮影)

「肉筆彩色  
西国街道名  
所絵図」に  
「塔ハ林丹  
波守建立」と  
ある。慶長十  
二年六月の  
墨書は、慶長  
十三年十月  
(他説では十  
二年十月)と  
伝える林正  
利の没年と  
矛盾しない

ことから、現存するこの多宝塔は彼による建立の可能性が高い。  
そこで生ずる問題は、林丹波守正利は、なぜ永満寺に多宝塔を建て、  
そして葬られたのかという点である。正利は美濃国出身で、幕府旗本にな  
ってからも、所領は全て美濃国内である(20)。息子の丹波守勝正は、生国  
が摂津国(大阪府)となっているが、詳細は不明であり(21)、正利・勝正父  
子と永満寺や梶原村との接点を見出すことはできない。信仰心や同寺僧侶  
との個人的なつながり(22)、関ヶ原合戦・大坂の陣前後の政治的背景など  
も想定する必要があるだろう。

### おわりに

本稿では、畑山神社の由緒に登場する林丹波守が、江戸幕府旗本の林正  
利であると比定すると共に、かつて同社に存在した多宝塔が慶長十二年  
(一六〇七)の建築で、正利が建立に関わっていた可能性が高いことを紹介  
した。

しかし、正利が畑山神社の前身である永満寺の整備に関わり、同寺に葬  
られた理由を説明するまでに至らなかった。引き続き、新たな史料の収集  
を進め、永満寺・畑山神社の由緒の整理と、林丹波守正利と梶原地域の繋  
がりをとらえたい。

### 【注】

- (1) 『大阪府史蹟名勝天然記念物 第二冊』(大阪府学務部、一九二八年)。
- (2) 『高槻市史』「第一巻本編Ⅰ」(一九七七年)。「第三巻 史料編Ⅰ」(一九七三年)。第  
六巻 考古編」(一九七三年)。
- (3) 『高槻市文化財年報 昭和三十一・五十二年度』(高槻市教育委員会、一九七八年)。
- (4) 『高槻市文化財年報 平成23年度』(高槻市教育委員会、二〇一四年)。
- (5) 『名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第3輯 中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う梶  
原瓦窯跡発掘調査報告書』(名神高速道路内遺跡調査会、一九九八年)。
- (6) 前掲(2)及び(5)に同じ。
- (7) 明治元年十月十八日付「法華宗三十三番神其他神祇ノ称号混用ヲ禁ス」(『太政類典・  
第一編 慶長三年〜明治四年・第三百三十三巻・教法・寺院』国立公文書館デジタルアーカ  
イブ)。
- (8) 『摂津永福寺多宝塔・狭山山不動寺第1多宝塔』(インターネットHP「日本の塔婆」)
- (9) 『梶原村 長谷川寛家文書目録』(『高槻市史料目録第二三三号』高槻市教育委員会、二  
〇〇一年)。
- (10) 源平合戦や南北朝時代の合戦に関する史蹟について、「明和三マデ〇〇〇年ナル」とい  
う記述がある。
- (11) 『寛政重修諸家譜第七百七十 藤原氏 利仁流 林』(『新訂 寛政重修諸家譜』巻十  
二、統群書類聚完成会、一九六五年)。
- (12) 『大日本近世史料 諸宗末寺帳 下』(東京大学史料編纂所、一九八三年)。
- (13) 前掲(9)に同じ。
- (14) 林正利の事績については、特記なき場合は前掲(11)を元としている。
- (15) 『寛永諸家系図伝』巻九(統群書類聚完成会、一九八六年)。及び『干城録』(一)『内閣  
文庫所蔵史籍叢刊 第57巻』(汲古書院、一九八六年)。
- (16) 売却の経緯については、多宝塔跡地に建てられた石碑「多宝塔創建畑山神社修繕記」に  
詳しく記されている。
- (17) 『埼玉県指定文化財調査報告書 第四集』(埼玉県教育委員会、一九六五年)
- (18) 『埼玉県のホームページ』「埼玉県所在国指定・県指定等文化財」覧」によれば、名称・  
多宝塔、所在地・所沢市上山口二二三 狭山山不動寺、所有者・西武鉄道(株)となっている。
- (19) 前掲(17)に同じ。
- (20) 『林丹波守宛領地朱印状・知行目録』(『岐阜県史 史料編 近世二』岐阜県、一九六  
六年)。
- (21) 前掲(15)に同じ。
- (22) 寛永年間(一六二四〜四四)作成の『御馬印 卷三』(国立国会図書館蔵)には、「南無妙  
法蓮華経」の題目を書いた息子勝正の馬印が載っており、林氏が熱心な日蓮宗の信徒であ  
ったことがうかがえる。

発行日 二〇一五年三月十四日 編集・発行 高槻市立しろあと歴史館

◆ホームページ：高槻市ホームページ「インターネット歴史館」内で掲載

[http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi\\_kanko/rekishi/rekishikan/chosa/shiroato/136609344926.html](http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi_kanko/rekishi/rekishikan/chosa/shiroato/136609344926.html)